

一人で働いた抑留生活

岩手県 佐々木 正 志

日本軍隊の生活は六か月。あの遠いシベリアの寒いところで生活は四年間やってきました。私は初年兵とはいえども、繰り上げ検査ということで十九歳で検査して、次の年の二十年の二月十日に青森県の東部六十部隊というところに入ったわけです。そして、一週間足らずで満州へ行つて、一応チチハルというところに行つて軍隊生活を営んでおりました。そして、三か月で検閲というか、それを終わつて安心したところ、衛生兵教育にお前が行つてこいと、行つた以上は必ず上等兵になるように勉強するんだよと言つて期待をかけられておりました。そうしてハルビンの何という部隊かわかりませんが、各部隊から二、三人の人が集まつて教育を受けて、あと一週間で本隊に帰れるというその間に戦争が始まつた。そこである女学校の

裏に部隊が集まつて、人数は忘れましたが、そこで戦争をやる準備をしていたところが、偉い人たちは前の方から敵が来るだろうという予想なうでございましたので、それで前の方だけ嚴重にやっていたら、後ろの方からソ連の大きな戦車がメロメロと来て、ああ、何ともならないと。タコつばさ入つて爆薬抱えて戦車引っくり返す練習をしていたんだけど、引っくり返すも何もできない大きなものがモリモリと来たので、まず負けてしまったと、こういうふうな状態でございます。

そして、終戦の日から何ばかりかわからないけれども、いづれ一週間ぐらひは歩いて何か糧秣倉庫というところへ行つてそこで武器を取り上げられ、戦車などを穴を掘つて埋めて、焼いたようでした。そうして、八月の十五日か二十日だと思ひましたけれども、ソ連のジープですか、自動車、あれが何百台と続いてきて、六人がけのいすは六人、四人がけのいすは四人で乗つてずうつと行つた。そして、満州とソ連の境目のところに行つたときは大体お昼過ぎかくらいな感じ

をしております。そこで休憩、下車してここがロシアと満州の境だからということで、スイカをみんなでごちそうになりました。そして、あとは夜通し走っていったところが何か湖の淵のところへ降ろされて、そこで一週間ぐらい芋掘りしたような状態、あるいは若干干し草なんか刈りましたけれども。その後大体ハバロフスク、ウオロシロフ、あそこ付近に第三ラーゲルというものをつくって、そのラーゲルの内容は全くの準備段階でございます。地面よりは高いところはあるものもなし。屋根は丸太に何かそこらあたりにあるものを並べて土をかけた。中は乾草を引いて毛布一枚。こういうところで皆さんと一緒に生活をやってきましたが、私は幸いというか不幸というか皆さんと一緒に働かないで、向こうの兵隊の炊事というような形で務めました。ところがラーゲルのすぐそばに八角形天幕を張って四頭の馬を入れて、馬車を二台もって毎日十二、三里の道のりを食糧運びの手子（てこ）になってしまつたわけです。だが、ラーゲルのすぐそばのために私たちの捕虜生活というものはしっかりと頭の底に今も入

っております。むろん食糧は皆さんわかっているとお
り、おかゆというような状態でございましたが、一番
困ったのはまきがないこと。そこで今のような健康体
ではむろんないわけです。でも練兵休という病人と定
められた人たちが十人、二十人ぐらいはそのジミラン
カの中で休んでおりますけれども、炊事をする人だつ
て四、五人です。まきをとってくる暇がないから、要
するに休んでいる人たちに、行ってとってこうと、ま
きを持つてこうと、こういうソ連の言い方なんです。
で、まき運びというから私は小まきか、石炭か、そう
いうものを運んでくるもんだなと、そう思っております
したけれども、しよつてきたのを見るとトンビの巢み
たいなもんだ。ナラの木のごようみみたいなようなもの
をしよつてくる。ただし、何里先向こうまで行ってと
つてくるんだか私はわかりません。大体私が歩いてい
るコースは大本は一本もございませんでした。ナラの
木のごようというか、腰だけから背たけぐらいな長さ
のもの、それをへし折ってくるような状態で、結局そ
の病人が何里も向こうへ行つてまき運んでくるもんだ

から、次の日はすぐ使えんような状態になってしまふ。

二日目か三日目にはこの人は必ずあの世行きになってしまつておりました。ところが、そのままラーゲルに置いておくわけにはいかなから、次の日和尚さまを務めていた軍曹の人があつてその人が拝んで、そして私が馬車へ乗せてつて、ちよつと小高い森へ運んで私も南無阿弥陀仏と言つて拝んで、置いてきたと言つた方が早いです。なぜかと言へば、シベリアの湿地帯が凍つてしまつたら、スコップもツルハシも刺すだけで掘り上げるといふことは絶対不可能です。だから、ちよびつと掘つたぐらいな程度で、それが凍つてしまつたもんだから、前の日に寝せてきた人を、ごめんくださいというふうな気持ちでゴロツと横に引っくり返して、馬車へ積んである死人をそこへまた寝せておく。それが何十人かは繰り返してきました。

その中に江差の人でございますけれども、どうしても戦友の位牌をほしいといふことで、そのバラ線の下をくぐつていく氣したところが、歩哨に見つけられて止められた。殺されたわけでもないし、何でもなかつ

たけれども、それで、私一度イワンという名前をもらつておりましたから、その江差の人に、イワンおれどうしても戦友の位牌をほしいから持つてきてけれねえかといふことで、私は夜でも自由に歩けるし、毎日歩くところだから道のりもわかつていますから、夜行つてもらつてきて、こつそりと江差の人に渡しましたけれども、ジミランカへ入ると、病氣あるいはシラミを持つてくるから、絶対私はラーゲルの中へ入られなかつたわけなんです。それで、幸い自由に歩けるといふのは、ソ連の兵隊たちは五里、十里先のコルホーズのかわいい女の子とバラライカをはたきながらダンスをするのが楽しみで、それを夜、馬車を御していかなければならないから、そういうことで自分はシベリアで一人であつたけれども、自由行動におかれた。皆さんと一緒に作業はしなかつた。

その皆さんの作業の内容は、まず夏から秋にかけて草を刈る。三尺ぐらい長い鎌に六尺ぐらい長い柄をつけたもので、一グループ十五人で刈つております。それを干したものを今度山にかさげておいて、それが一

か月も二か月も刈った草が山になったのはみごとに大きくたくさん並んであります。それを雪が降るようになって寒くなつてから、今度それを毎日プレスをやっております。それでもまきがなくて困るからこの乾草をたかせるということを私が言ったら、これはバルブになるので一部家庭でも燃すことはできないんだから、お前たちはお前たちでまきをとってきてという説明で、私の炊事班では干し草を燃やして食事の準備をしたことは一回もないように思っております。

非常に私は寒いところへ、朝早く夜遅く歩くもんだから、凍傷にかかつてしまつて、ちよつと寒いと手が白くなる。でも仕事をしなければならぬし、しょうがないから手を温つたためには馬の股さ手をやつて温もりをとつて作業をした。そういうことがたびたびあります。

私に残る心のシベリア

青森県 葛西 保

寒さと飢えと、猜疑と人間不信、そして絶望のシベリアの三年間は、よきにつけ、あしきにつけ、私の心から消え去ることはない。

星霜四十有余年を経た今、体験したシベリアの三年間を凝縮して、思い出を語ることにする。

吹雪の中に見た恨みの火、有刺鉄線が張りめぐらされただけの、建物はおろか天幕もない収容所に入れられた終戦の年の十一月末、寒さによるえながら、昼は山で住む家を建てる材料集め、夜は凍りついた雪の上にたき火をして、雪の上にゴロ寝、そしてたき火の後に穴を掘り、赤松を丸太のまま積み重ねて建てたねぐらである。

こうして始まつたソ連抑留の三年の最初の地“ハラゴン”は忘れることができない。